

音の質を問うピアノ指導

— 保育者養成におけるピアノ教育〔Ⅲ〕 —

嶋田 由美（大阪女子短期大学）

1. はじめに

第48回大会において筆者は、音楽的表現力を伴ったピアノ演奏技術の習得という観点から精選した保育者養成校におけるピアノ指導教材を提示した。そして同時に、効率よくピアノ指導を行うためのレッスンのポイントを明記したグレード表作成の試みについても報告した。前回第49回大会においては、これらの教材とグレード表を用いたピアノ指導の有効性を検討するとともに、1年間の学生への指導の成果を報告した。

ところで、学生の音楽的表現力を育成するためにはまず、学生自身の内に意識的に「音」に向える力をつけさせることが必要であると考えられる。すなわち、自分自身が奏した「音」を聴き取る力、そしてその「音」の質を問うことのできる力を育成すること、さらに言えば、演奏される前に「音」の質をイメージし、心の中で聴き取ることのできる力を育てることが、学生の音楽的表現力の育成を目指したピアノ指導の最も根本的な課題であろう。この「音」の質を問える耳を育てることは、何よりもまずタッチの問題、つまり如何に鍵盤に触れ、また離鍵するかという問題に焦点を当てて検討されるべきである。特に、短期間にテクニック面を重視して行われがちな保育者養成のピアノ指導にあっては、この点は再考されるべき重要な問題であると考えられる。

本研究は、このような観点からピアノ学習の初心者のために「音」の質の問題に焦点を当てて編成した楽曲、「Cのプレリュードとワルツ」（楽譜1）及び「Cの夜のうた」（楽譜2）の教材としての価値を考察するとともに、この楽曲の指導実践を顧みて学生の耳を育てるピアノ指導のあり方を検討するものである。

2. クルターク作曲「Cのプレリュードとワルツ」

及び「Cの夜のうた」の教材としての価値

クルターク・ジョルジのピアノ曲集『遊び』は作曲者自身がまえがきで「ピアノを学ぶ第一歩から〈中略〉ピアノを弾く喜びや動くことの楽しさを味わうことから始めようとしている。」あるいは「書かれている譜面のイメージ、つまり音楽の流れや響き、静寂の質に関することは、真剣に受け取ってほしい。」¹⁾と

述べているように、演奏者に音の質や響きなどを良く耳で聴き、創造的かつ能動的にピアノに向かうことが求められる作品集である。その中でも「Cのプレリュードとワルツ」及び「Cの夜のうた」の両曲は、C音のみで構成されていながら、タッチ、腕の使い方、楽曲の構成、フレージングなどの勉強が可能な優れた楽曲であると考えられる。例えば「Cのプレリュードとワルツ」では鍵盤の全域にわたって腕を十分に使ってC音を弾くことが求められ、それによって音楽が広がっていく感じ、また閉じてくる感じを自然に体得することができる。また「Cの夜のうた」ではタイトルから得られるイメージが楽曲に要求されるタッチの勉強の方向づけをし、学習者の「音」に対して意識的に向かう学習を助けてくれると思われる。

このような点で、両曲は特にピアノ学習の初心者にとっても極めて質の高い教材となり得ると考え、本学では表1に示すように鍵盤楽器学習経験の少ない学生を対象にしたグレード1に編成し指導を行っている。そしてタッチの面でもまた曲想の面でも対照的なこの2曲を同時に学習することによって、学習者がピアノという楽器自体の表現の可能性を知り、自ら意識的に「音」に向えるように、また両曲の対比を通してより一層、「音」の質を問える力を育成できるように配慮している。

3. 「Cのプレリュードとワルツ」及び「Cの夜のうた」の指導実践

楽譜に示すようにこの両曲は譜読みという観点からは一見、簡単に見られがちな楽曲である。その反面、演奏者の表現力、音楽的知識や理解の度合いが如実に表されてしまう楽曲でもある。一見、簡単そうな楽曲ではあっても、たったひとつの「音」と対峙することが如何に難しいかを知った上でピアノ学習を発展させていって欲しいという意図から指導者は、学生が少しピアノを学ぶということや楽器そのものにも慣れた頃を見計らって、この楽曲の指導に入るように心がけている。

次に平成8年度に行った4回にわたる両曲の学生への指導の概要について述べる。

第1回目 [6月12日]

まず教師の「Cのプレリュードとワルツ」と「Cの夜のうた」の模範演奏の後、これらの楽曲で学ぶべきことを学生と話し合う。そして両曲では特に鍵盤に触れる前に曲想や音をイメージすべきことを話した後、各自のイメージにふさわしい「音」のためにさまざまなタッチを試みることを勧める。

第2回目 [6月19日]

いずれの学生も「Cのプレリュードとワルツ」については正しくC音を弾こうとする意識が強く、自然な腕の動きの勉強ができていないので、鍵盤上ではなく蓋の上で動きの勉強をするように指導する。一方、「Cの夜のうた」はタッチのスピードをコントロールすることが難しく、従って音には響きがなく、またフレーズ感にも乏しい演奏となっている。まだ学生自身ではこの2曲を学ぶことの意味付けがなされていない様子である。

第3回目 [6月26日]

「Cのプレリュードとワルツ」では次第に鍵盤の全域にわたって腕が自由に動けるようになってきている。またこの曲を弾くことに少しずつ楽しみを感じ始めているようである。

「Cの夜のうた」でも少しずつ自分の奏した「音」の質を評価することができるようになっている。

第4回目 [7月3日]

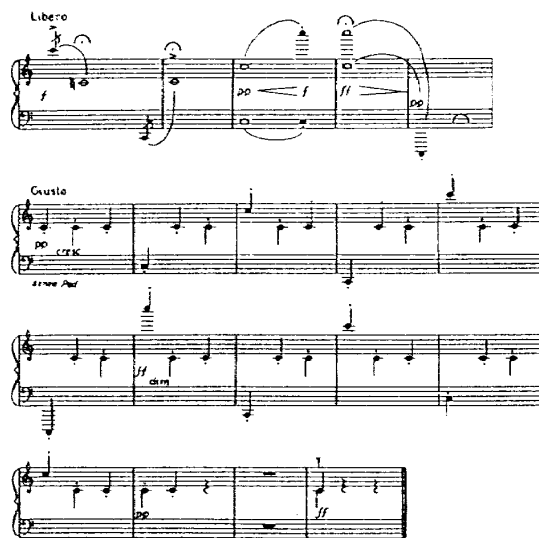
学生自身の両曲への嗜好がはっきりしてくるが、一様に当初は簡単な曲だと侮っていたが、グレード1の全曲の中で一番難しい曲であると述べる。

4. おわりに

「Cのプレリュードとワルツ」及び「Cの夜のうた」を教材として用いた指導の後、学生の内には明らかに、「音」を良く聴き、自分で「音」を評価していこうとする姿勢が見られるようになってきた。また学生自身も常に曲のイメージを持って弾くことの大切さとたったひとつの「音」による表現の可能性を知ったようである。この点でこの両曲の、特にピアノ学習の初心者を対象とした指導における教材としての価値付けがされ得るであろう。今後は、他の教材についても教材の価値を指導の中で問い直し、またその価値を最大限に生かせる指導方法を追求し、学生の「音」の質を問える耳を育て、音楽的表現力を育成することを目指したピアノ指導を展開していきたいと考えている。

1) 「著者まゝがき」『遊び』（全音楽譜出版社）

楽譜 1

Cのプレリュードとワルツ
Prelude et Valse C. Deb.

楽譜 2

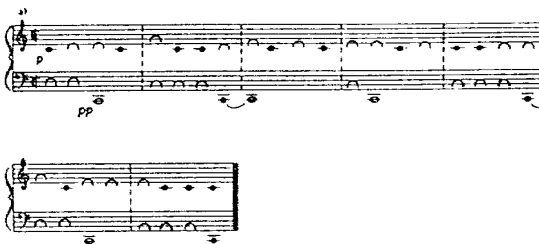
Cの夜のうた
Chanson de nuit C. Deb.

表 1

グレード 1

幼児教育専攻 年 番 氏名 (担当: 先生)

曲名	レッスンのポイント	月日	サイン	備考
1 Cのプレリュードとワルツ	腕全体の自由な動き 全鍵盤中のC音 ワルツ 自然なcresc., dim. キッチのテクニック	/	/	
2 Cの夜のうた	フレーズ感 ゆっくりしたタッチ 音色 低音域でのpp 休みにも音を聴く	/	/	
3 おかしな出来ごと	両手交互のフレーズ 3拍子の重さと軽さ 再現部 B部分での緊張	/	/	
4 メロディー	レガート ゆっくりしたタッチ 形式 II音の意識	/	/	
5 フーガ	重さと軽さ 柔軟な手首 両手の役割の交替 形式	/	/	
6 5.3.	小指を伸ばすフレーズ 深さのある音 B部分のけずりつつの勉強	/	/	
7 77. ノッキング	連打 (ボームの動きで) CとFのレヴェルの意識 質問と答の形 再現部	/	/	
8 79. うた	メロディーと伴奏の形 長いフレーズ 形式 レガート 伴奏の音の方向性	/	/	
9 113.	調曲の雰囲気 メロディーと伴奏の音色の違い 形式 個性 non legato	/	/	
10 114. ガボット	ガボットの形式 Grazioso 重さと軽さ non legatoとlegato	/	/	
11 こもりうた (連弾)	互いの音のバランスを聴く 再現部とコーダ dolce とdeciass. rit.	/	/	
12 メヌエット d. moll	メヌエットの形式 6拍のユニット ムード non legatoとportato espr. 柔らかなタッチ	/	/	